

二〇二三年度 入学試験問題

国 語

第三回

【注 意】

- ・ 試験時間は五〇分です。（八時五〇分～九時四〇分）
- ・ 問題は一ページから七ページまでです。
- ・ 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- ・ 字数制限のない問題について、一行分の解答らんに二行以上解答してはいけません。
- ・ 記号・句読点がある場合は字数に含みます。
- ・ 解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。



洗足学園中学校

1 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

(1) 環境保全について考えるとき、僕らは「平等」という倫理上の概念に直面する。たとえば、先進国に住む僕らと発展途上国の人びとの平等。現代の地球の総人口のかんりの部分は発展途上国が占めている。発展途上国では、一人当たりの二酸化炭素排出量が少ない。日本やアメリカのような先進国と違って、自家用車やエアコンなどがあまり普及していないからだ。もし発展途上国が発展し、僕ら日本人とおなじような生活、スイジューンを持つに至ったらどうなるだろう。そのときは地球全体の二酸化炭素排出量がさらに増加し、地球温暖化はさらに深刻さを増してしまう。それならば発展途上国に経済援助をするのをやめて、彼らには貧しいままでもいいからうのがよいのだろうか。

平等については、世代間の平等という概念も必要だ。いま僕らは、化石燃料をガンガン燃やして豊かな暮らしを享受している。しかしこのような人間の放漫な暮らしは、いつまでも続けられるわけではない。世界の環境収容力には、ゲンカイがあるからだ。僕らが資源をどんどん使い環境を汚染してしまつと、次の世代の人たちが僕らのツケを払わざるを得なくなり、その暮らしは悲惨なものになってしまうかもしれない。そう考えると果たして僕らは、次世代のことを考えずに好き勝手わがままに暮らしていいのだろうか。これが世代間の平等の問題である。これは「持続可能な発展」という概念との関係が深い。僕らは豊かな暮らしを追い求める人間の性を持つているけれど、それが持続可能か、A 次の世代も、その次の世代も、このチヨウシで暮らして良いかどうか考える必要がある。

倫理の話題をもうひとつ。アルファベットでNIMBYと書く問題だ。これは「Not In My Backyard」の頭文字を取つたもの。日本語に直すと「僕の裏庭 (Backyard) はゴミだ」みたいな意味になる。これはごみ問題を考えるときのキーワードだ。僕ら人間が生きていると、どうしてもごみが出てくる。B、そのごみ処理場が自分のうちの近所にできるとなると、住民は反対運動を行つたりする。葬儀場や原子力発電所なんかもそうだ。僕らの暮らしにはそれらの施設が必要なのに、自分の家の近くにあることには反対してしまう。C 原発は人口密度の低い場所に立地していることが多い。東京電力が原発を東北地方の福島県につくつたのはそういうことだ。関西電力の原発は北陸地方の福井県に立地している。NIMBY

は、僕らが考えるべき倫理上の問題だ。環境破壊も環境保全も、それにかかわる人びとの気持ちが強くなるのである。

僕は環境科学の研究者であるが、自然保護至上主義者ではない。自然保護には価値があるが、その価値はソウタイ的なものであると思つている。「世界中の全ての自然を保全しよう、一木一草たりとも切つてはいけない」なんてことになる人間は生きていくことはできない。人間が生きているということは必ず自然のカイヘンをとまなう。自然破壊をゼロにすることは無理だ。考えるべきなのは、どの程度の自然破壊を許容し、どの程度の自然保護を行うかという程度の問題である。

これは、人間同士の関係性にも似ている。(3) 僕ら人間個人には人権があり、それはとても大事なものである。しかし、人権を持っているのは世界で僕ひとりではない。世界じゅうの人間がみな、人権を持っているのである。だから僕ひとりが幸せになるようなわがままはダメだ。みんなが幸せになるように、ときにはがまんしなければならぬこともある。これは幼稚園で習うようなごく基本的な考え方である。

これと同様に、自然も人間もなんらかの権利を持っていて、それらは絶対的なものではない。だから、状況に応じて、自然や人間がお互いを尊重し、ときには譲り合いながら共存していくべきなのである。まさに、人権の考え方を自然物にまで広げるといふやり方である。お互いに敬意がある人間関係がうまく行きやすいように、自然と人間の間にもリスベクトがあるといい。必要な時は自然を使わせてもらうこともあるけれど、必要以上に破壊することはないし、いつか元に戻すことが可能な方法で使わせてもらうように心がける。

D、環境保全をするとなると、そのために人間はなんらかのアクションを行う必要が生じる。それはしばしば、自然を守るために人間が犠牲を払うというかたちを取る。自然を守るために税金を上げるとか、レジ袋を有料化するとか、ある場所を立ち入り禁止にするとか。これは、生態学でいうところの、「プラスーマイナス」の関係である。自然にとつてプラスであり、人間にとつてマイナスなのだ。となると人間は、できることから不利益をこうむりたくないと考えるようになり、自然保護に対する反感も生まれてきたりする。

これをなんとかして「プラスー(4)」の関係にできないだろうか。僕

はこのために腐心^{ふしん}している。イソギンチャクとクマノミのようにおたがいにメリットがあるなら、人間はここから自然を愛し、自然を守るようになるだろう。そのための手法として「ビジネス化」がある。

ビジネスとはすなわち「お金儲け」。自然保護を「ネタ」に人間がお金を稼げるなら、自然と人間はお互いにメリットのある共存関係にいたれるのである。これまでは、自然保護はビジネスの敵、自然保護のために経済を規制するのは反対、みたいな論調が大きかったが、だんだんと、自然保護することでお金を儲けていいんだよ、実際に儲かるんだよ、みたいな仕組みができて始めているのである。

そもそも、お金儲けは罪ではない。現代に生きる僕らは、大人になるとみんな何かのかたちでお金を稼いで生活するようになる。お金儲けを否定するということは、人間が生きるのを否定することとさえ言えるだろう。環境保全側の人間もこれをしっかり認めたくえで、自然保護に役立つお金の儲け方を提案するというのが前向きなやり方なのである。

このような考え方を持つ人のことを、環境科学の基礎^{きそ}を形づくった研究者のひとりE. F. シューマツハは「⁵⁾悲観的楽観主義者」と呼んだ。ただの楽観主義者は、負の側面に目をふさぎ、根拠なく「人間は素晴らしいから、自然は偉大だから、環境を守れる」というようなことを言う。ただの悲観主義者は、「人間は利己的だから、環境保全なんてできるわけがない」などと言う。環境保護を実現するには、楽観主義者でもだめ、悲観主義者でもだめ。ものごとの負の側面を厳然たる事実として受け止めたうえで、それでも僕らは問題解決のために努力し続けると決意するのだ。これが楽観的悲観主義者の考え方である。

「愛で地球環境を救いましょう」なんてキャッチフレーズを掲げるのは、単なる楽観主義者だと思う。確かに環境を守るには、愛などのポジティブなモチベーションは不可欠だけど、それだけですべてを片づけようとしてはいけない。「この愛に共感できないあなたはこのころの冷たい人だ」なんて罪悪感で人を動かすはじめたりしたら、まったく目も当てられない。人間は利己的で、いいところもわるいところもある。それを率直に認めたくえで、僕らにできることを考えていこう。

(伊勢武史『2050年の地球を予測するー科学でわかる環境の未来』)

95

90

85

80

75

70

65

★放漫^{ほうまん}……………でたらめでしまりのないこと。
★腐心^{ふしん}……………心をくだくこと。

問一 — (1) 「環境保全について考えるとき、僕らは『平等』という倫理上の概念に直面する。」とありますが、ここでいう「平等」とはどのようなことですか。解答らんに二行以内で説明しなさい。

問二 — (2) 「NIMBYは、僕らが考えるべき倫理上の問題だ。」とありますが、どういうことですか。次のA〜Eの中から一つ選び、記号で答えなさい。

A ごみ問題を考えるとき人間がごみを出すことが環境問題の根源であり、そのことを無視することはできないということ。

I 葬儀場や原子力発電所を自分の家の近くには建てたくないからといって人口の少ない地方に押し付けてはならないということ。

U 暮らしに必要なものであるのに自分の住まいの近くには置きたくないと考えるのは自分の感情ばかり優先しているということ。

工 環境保全について考える際には人々の権利や利益を考えるべきであり、地域の格差はそれに基づいて考える必要があるということ。

問三 — (3) 「僕ら人間個人には人権があり、それはとても大事なものである。」とありますが、筆者は環境保全に対しどのような考え方を持っていますか。「人権」という語を用いてその内容を解答らんに二行以内で説明しなさい。

問四 — (4) に当てはまる一語を文中から抜き出して答えなさい。

問五 — (5) 「悲観的楽観主義者」とありますが、これは環境問題に関してどのような考え方をする人ですか。解答らんに三行以内で説明しなさい。

問六

A D

に当てはまる語を次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。)

- ア だから イ しかし
ウ さて エ つまり

問七

――(ア)～(オ)のカタカナを漢字に書き直しなさい。

問八

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 地球環境について考えるときには「平等」という概念が必要であり、すべての人が等しい幸福を得られるように社会制度や政治のしくみを変えていかななくてはならない。
- イ 自然を守るためにはあまりに悲観的になりすぎてはいけないのであり、人間がそれぞれの人権を尊重しながら幸せになるために今できることを続ける必要がある。
- ウ 環境保全のためには一部の人の負担ではなく、すべての人が責任を果たすことで利益を生むビジネス化が生まれ、実質的にその目的を果たすことができる。
- エ 人間が自然と共存していくためには人間が本来持つ一見欠点にも思える性質を冷静に理解し、それを生かして地球環境を保全するための方法を考えていく必要がある。

2 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

涼万は音楽室の入口のすぐそばまで来た。ドアは開いている。手前で立ち止まった。壁に身を寄せ、軽く目を閉じた。清らかな歌声は、まるで心の澱を洗い流すように、涼万の胸の奥まで押し寄せてはよどみなく流れていった。

ずっと聴いていたい。もっと近くで聴いてみたい。

首だけ伸ばして中をのぞいてみた。

早紀はいつもの指揮者が立つ位置で、指揮棒を振りながら歌っていた。

涼万は目を見開いた。

早紀の指先につながった指揮棒は、まるで体の一部のようになめらかに表情豊かに動く。目の前には誰もいないのに、合唱隊形に並んだ生徒たちがいるみたいだ。

水野がこんな透명한声で歌うなんて、誰も知らない。そのことを知っているのは、俺だけだ。うん、たぶん、きつと。

指揮棒を振りながら上体を揺らして歌う早紀の姿から目が離せなくなった。指先がじんじんしてきた。三度目の繰り返しフレーズが始まった。もう歌が終わってしまう。

——はじめはひとり孤独だった

ふとした出会いに希望が生まれ

新しい本当のわたし

未来へと歌は響きわたる

次の「la la la」が続くところで、早紀は最初の「la la」でふつと歌うのをやめた。涼万の心臓がぼつこんと動いた。本当に何センチか前に飛び出したかと思った。

……気づかれた。

サッと逃げようと思えば逃げられたのに、意思とは反対に体はちんとフリーズした。おのずと呼吸も止まっていた。でも早紀はドアがある左側を向くのではなく、ゆっくり右奥を振り返った。

そこには壁と同化したような、音楽倉庫に続く扉がある。しばらくして、その白い扉がぎつと音を立てて開いた。さらに間をおいて、音心がバツが

30

25

20

15

10

5

悪そうに首をすくめながら出てきた。

涼万の心臓がまたしてもぼつこんと動いた。そして、今度は反射的に首を引つ込めて、壁に身を隠した。汗がどっと噴き出したのに、指先は冷たい。「音心だったの？ びっくりさせないでよ。倉庫に人がいるなんて思っていなかったから」

《I》

中から早紀の声が聞こえる。

音心って、呼び捨てかよ。水野、井川とそんなに仲いいわけ？

なんだか胸がざらつとした。

「ごめん。使っていない古いティンパニーが倉庫の奥にあるって先輩から聞いたから、探してたんだ。そしたら、早紀の歌声が聞こえてきたからさ」

《II》

「やだ、聴かれてたんだ」

早紀の照れるような声に、こそばゆい気分になった。どんな風に、はにかんでいるのだろうか。見たい。おでこのあたりが熱くなった。

「最後まで歌を聴いてから倉庫を出ようと思ったのに、気づかれちゃったみたいだね」

《III》

「なんか、気配感じたの」

「そっか、気配ね」

《IV》

音心はフツと笑ってから続けた。

「それにしても合唱コン、早紀は歌わないと本当にもったいないな。指揮者じゃね」

《V》

「……そうかな」

早紀の声がくもる。

「でもこのクラスで振れるのは、早紀くらいしかないか。あいつらがもっと真面目に歌ってくればな」

《VI》

投げやりな感じで音心が言った。岳いわく「ただのオタク」に見えた音心が、クラスメイトのことを「あいつら」よばわりしていることに、涼万は小さなシヨックを受けた。

60

55

50

45

40

35

「わたしの指揮がよくないんじゃないかな」

「そんなことないよ。えっ、まさかそれで指揮の練習？　どんなにうまく振ったって、ムダな気がするけど。あいつら、どうせ音楽なんて分かってないっしょ」

(2) 涼方の眉間みげんがしぼられた。

音楽が分かっているなんて、俺にはとうてい言えっこないけど、その言い方はあんまりじゃね。

歌声をこっそり聴いていたときの清々すがすがしい気持ちが一気に吹ふ飛んだ。

腹の奥からむかむかが肥大ふたいしていく。早紀は音心の言葉をスルーして、

「あ、今日はありがと」

と、話題を変えた。

「なんだっけ？」

「ピアノの即興そくきょう演奏。音心、またピアノの腕うで上がったね」

「最近、ジャズに興味があるんだ」

「へえ。確かに音心はジャズが向いているかも知れないね。あるとき、音心の即興にみんないっせいに注目したよ。だから……」

「だから？」

「うーん、うまく言えないけど、音楽が分かんとか分からないとかは、理屈りくつじゃなくて……。いいものは誰の心にも届とくんだよ」

「早紀はいい子だね」

音心は少し間を置いて、

「いい子いい子」

と、続けた。それはまるで、頭をなでながら言っているようなそんな間合あひいで、またしても勝手に映像が浮うかんでしまった。胸が **A** 騒さわぎ出す。

どんな物音も聞き逃のがすまいと、涼方は壁際かべぎわに耳をさらに数センチ近づけた。教室の中をのぞいてみたい気持ちと、のぞいてはいけない気持ちあつが交錯まじり錯さくしだす。

そのとき、廊下ろうかの奥からひよいと人影ひとかげが現あわれた。

顔ははっきり見えなくても、少しがに股またで **B** 向むかってくるミニ丈たけの

スカート姿で、一発で晴美だと分かった。涼方は晴美の方かたに向かって、足音に気をつけてダツシユした。

晴美は駆け寄か寄かってくるのが涼方だと分かったと、パッと顔を明るくさせて

何か言おうとした。が、涼方はそれを制するように口もとに人差し指を立てると、晴美の腕をいきなりつかんで階段の方に走り続けた。そして、一階と二階のあいだの踊り場までくると、ようやく腕を離れた。

「ど、どしたの？　涼方」

晴美はつかまれていた腕のあたりをさすった。

「あ、ごめん。えっと、先生が残っている生徒がいなか見回みまわったから」

涼方の目がうるうる泳いだ。

「そうなんだ。じゃ、早く校門出ようよ」

晴美は一瞬いつしん 腑はらに落ちないような表情を見せたが、すぐにまた駆け降りだした。階段を一段飛ばしで降りながら、晴美はひそひそ声で続けた。

「涼方が教室に弁当箱取りに行いったって、岳たけから聞いたから。しばらく待ってただけど、なかなか来ないからさ」

「なんで俺待まちったの？」

「んー。まずは、学校出よ」

「おう」

ふたりは手早く下駄箱げだばに上履うわばきをしまうと、校門を一気に駆け抜けた。

「キント、足はえーな」

涼方が弾はずむ息を整ととのえながら言うと、

「わたし、学年で一番足速いし」

晴美が得意とくいげに眉まゆを上げた。

「さすが女バスだね」

「まあね。涼方だらって速いじゃん。一番じゃないの？」

「いや、岳の方が速いんじゃないか。ってか、なんで俺のこと待まちってたんだっけ？」

涼方は横を歩く晴美に、ちらりと視線を送った。晴美は間を取るように、ショートカットの髪かみを右手でくしゃっとつかんだ。

「合唱コンのことだよ」

「へ？」

喉のどの奥から変な声が出た。

「明日の合唱コンの朝練のこと。岳のやつ、涼方と俺は部活の朝練に行くからって、言い張はってただけど、ねっ、そうなの？」

「んぐっ」

また変な声、というより音が出た。それを肯定しょうめいと取ったのか、晴美は突と

然歩みを止め、顔の前で両手を合わせた。

「涼万、お願い。合唱コンの朝練に来てよ」

「な、なんでお前、そんなに急にやる気になってんの？」

今日の音楽の時間、水野が声かけたとき、最初はシカトしてたくせに。という続きの言葉は飲み込んだ。

「だってさ、わたし負けたくないんだよ。他の組、結構マジで練習してるらしい」

晴美の顔がバスケのときみたいに、急に戦闘モードになった。

「ふーん」

「ふーんってさ。うちのクラス、井川もめっちゃ伴奏うまいしさ。今からでも頑張れば、結構いけるんじゃないかって思うんだよね」

井川、という名前は涼万の胸をブスツと刺した。

「指揮者の水野さんがさー、もうちょっと仕切ればいいんだけどね。あの子じゃねー。やだ、指揮者が仕切るとかって、ダジャレじゃん」

黙っている涼万をよそに、晴美は笑い声を立てた。笑い声は涼万の耳をつつかえながら通っていた。

「あの子、ふだんから影薄いから」

晴美が嘆くように顔をしかめた。思わず晴美を横目で睨んだ。

「いや、水野は……」

言いかけて、何を言えはいいのかわ分からなくなって、口をつぐんだ。早紀が影が薄いのは、本当のことかも知れない。でも、何か弁護するようなことを言ってみようかと思ったのだが。

涼万はくちびるをとがらせて、学校の方を振り返った。夕焼けをバックに古びた校舎がそびえている。

まだ音楽室にいるのかな。

見えないと分かっているのに、三階の奥の方に目をこらした。

——(5) いい子いい子。

井川のやつ……。

鼻の両穴が膨らみ、首筋がカッと熱くなった。

「ね、涼万、どしたの？ 変だよ、さっきから上の空で。返事もしないし」

晴美の声に我に返った。

「いや、別に」

晴美の怪訝そうな目を振り切るように、涼万は歩き出した。涼万

160

155

140

145

140

135

は **C** 前を歩き、晴美はその後ろを小走りですべてきた。

しばらくして、後ろから足音が聞こえないことに気づいて、涼万が振り返ると、少し離れた四つ角のところで晴美が立っていた。

「あ、ごめん。速すぎた？」

涼万が首をすくめながら晴美のところまで戻ると、

「ううん」

晴美は少しうつむいて小さく首を振った。らしからぬ乙女っぽい仕草に、涼万はどきまぎして目を泳がせた。

「わたしんち、ここ曲がるから。涼万、明日の朝練、本当にお願ひ。涼万たちが来ると、クラスのみんなもやる気になると思うんだ。だから、考えといて」

「……ん」

一語で返すと、晴美はからりとした笑顔を作った。

「じゃあねー」

元気な声で両手を **D** 振ると、くるりと背を向けて道を曲がった。後ろ姿でも、がに股で闊歩しているのが分かる。足音まで聞こえてきそうだ。やっぱり、キンタだな。

晴美の後ろ姿はあつという間に小さくなった。

(佐藤いつ子『ソノリテイ はじまりのうた』)

180

175

170

165

問二

——(2)「涼万の眉間がしぼられた。」とありますが、涼万がどのようにふるまったのはなぜですか。解答らんに二行以内で説明しなさい。

問一

——(1)「今度は反射的に首を引っ込めて、壁に身を隠した。」とありますが、この時の涼万の心情を解答らんに合うように二行以内で説明しなさい。文末は「心情」や名詞で止めなくてよい。

問三

——(3)「腑に落ちない」とありますが、内臓に関することばを使った次の一～五の成句の意味を、後の「意味」ア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- 一 肝を冷やす
- 二 肝が据わる
- 三 はらわたが煮えくり返る
- 四 はらわたがちぎれる
- 五 心臓が強い

〔意味〕

- ア 腹が立って、がまんできない。
- イ あつかましく、ずうずうしい。
- ウ たえられないほど、悲しくてつらい。
- エ 落ち着いてどっしりしている。
- オ 危ない目にあってひやっとする。

問四

——(4)「笑い声は涼方の耳をつつかえながら通っていった。」とありますが、この時の涼方の心情を解答らんに合うように三行以内で説明しなさい。文末は「心情」や名詞で止めなくてよい。

問五

——(5)「いい子いい子。」とありますが、この時の涼方の心情としてふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 音心おとこころよりも自分の方が早紀さききを理解していると**悔くやしがっている**。
- イ 音心が早紀を見下し子ども扱あつかいしたのを思い出して**憤いきどおっている**。
- ウ 音心の早紀に対する親密な態度を思い出して嫉妬しつとに**いられている**。
- エ 音心が早紀の偽善ぎぜん的なところを見抜いて**からかったこと**に腹を立てている。

問六

次の文は、本文のどこに入りますか。次のア～カの中から一つ選び、記号で答えなさい。

壁を挟んで、涼方もまったく音心の言う通りだとひとりうなずいた。

ア《Ⅰ》イ《Ⅱ》ウ《Ⅲ》エ《Ⅳ》オ《Ⅴ》カ《Ⅵ》

問七

答えなさい。(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。)

ア ざわざわ イ ブクブク ウ がらがら エ ドスドス
 オ ドキドキ カ ずんずん キ もくもく ク ぶんぶん

問八

本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 音心は、素晴すばらしい歌声を持っている早紀が歌わないのは非常にもったいないと思っており、指揮者をあきらめてもらうために、クラスメイトのことを悪く言っている。
- イ 早紀は、音心が自分の才能を過信するあまりクラスメイトに批判的になりがちなることを心配しており、彼がクラスの中で孤立こりつしてしまわないよう心を砕くだいている。
- ウ 涼方は、晴美が急に女の子らしい仕事で朝練習に出席するよう頼んできたことに驚おどろき、今まで見過ごしていた晴美の可愛らしさに気がついて恋心を感じ始めている。
- エ 晴美は、他の組が真剣しんけんに練習していることに焦あせりを感じており、涼方が部活ではなく合唱の朝練習に来てくれれば、他のクラスメイトのいい刺激しげきになると考えている。

